

まちづくりオーラル・ヒストリー

—個々人の口伝の人生史を積層させることから社会的文脈を出現させる試み—

“Machizukuri Oral History”

Challenges to make social context apparent from accumulating individual's oral history.

山崎義人 兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師
後藤春彦 早稲田大学理工学術院 教授
佐久間康富 大阪市立大学大学院工学研究科 特任助教
田口太郎 新潟工科大学工学部 准教授

Yoshito YAMAZAKI University of Hyogo
Haruhiko GOTO Waseda University
Yasutomi SAKUMA Osaka City University
Taro TAGUCHI Niigata Institute of Technology

It is necessary for keeping these social memories of “Usual town” to take sharing process of these social memories by community design for cultural landscape. We authors have been practicing the community design through oral history collecting that we named “Machizukuri Oral History”. This paper shows the method of the “Machizukuri Oral History” and some practice cases. The possibility, the challenge and the perspective is discussed by these experiences.

1. はじめに

1-1 ふつうのまちの歴史と景観

まちの歴史とは、これまで為政者側に立って編纂されることが一般的で、歴史を活かしたまちづくりの拠り所となる歴史も戦国武将の活躍等の大きな歴史に目を奪われがちであった。その一方で、小さな歴史とでも呼ぶべき身近な生活環境に刻み込まれた記憶やその総体としての社会的文脈に対して着目する動きがようやく芽生えつつある。

「ふつうの町の歴史」とは、生活者によって共有された地域に内在する社会的記憶のことであり、社会的記憶は、身近な環境を構成している社会的文脈や地域的広がりをもつ景観^{註1)}によって伝えられる地域のアイデンティティの源泉を意味する。しかし、景観の乱れに伴って、そのような身近な社会的文脈は潜在化あるいは断片化してしまい、市民ひとり一人が認識していない、つまり社会的記憶として共有されていない状況にあるのではないかと考える。社会の価値観の変化を常にリードしてきた団塊の世代の前後で、受け継ぎが途切れてしまっていることが多い。また、家族が口伝によって伝えてきた、家や地域の社会的記憶も伝わりづらくなっている。

「ふつうの町の歴史」を活かすまちづくりには、身近な環境を構成する社会的文脈に配慮した景観まちづくりが必要であり、そのためには地域に内在する社会的記憶を抽出し共有し、地域内の生活者が再認識していくことが必要である。

1-2 社会的記憶をひも解く人生尺度

では、どのようにしたらその社会的記憶をひも解くことができるのか。筆者らは、まちの歴史の主体は市民ひとり一人であり、「人生」というひとり一人の生涯の時間軸から地域を捉えられるのではないかと考えている。人生という営みは、空間を場所化する行為の連続に他ならない。空間に手を入れ使い込んでいくことにより、さまざまな意味が発生し、記憶として蓄積され、空間は場所と呼ぶべきものとなる。場所とは社会的記憶の源泉である。

筆者らは、これまでに「まちづくり人生ゲーム」と名付けたワークショップを開発するなど、生から死に至る時間軸（人生尺度）を通して、まちづくりを考える試みを提唱してきた。90年代の静かな「自分史」ブームを背景に、個人の口述史（オーラル・ヒストリー）を積層させるというアイデアが生まれた。公文書的な歴史では抜け落ちてしまう生活者の目線からの個人史を集積することから、まちの歴史を編み直すことで、社会的記憶を顕在化できるのではないかと考えたのである。

1-3 まちづくりオーラル・ヒストリー

「ふつうの町」の社会的記憶を損なわないようにするには、社会的記憶を共有するプロセスを伴った景観まちづくりが必要になる。筆者らは、口述史の集積を介し、まちづくりにおいて、「役に立つ過去」を活かした「懐かしい未来」の姿を描くことを目的とする一連のプロセスとその成果を「まちづくりオーラル・ヒストリー」と呼び、これまでに実践してきた。

る^{注2)}。本稿では、この「まちづくりオーラル・ヒストリー」の方法と、幾つかの事例を紹介する。さらに、これらの経験蓄積から考えられる今後の展望について論考する。

2. まちづくりオーラル・ヒストリーのプロセス

これまでの経験蓄積から、まちづくりオーラル・ヒストリーのプロセスは、次の4段階を経るものと整理できる。

①個人の記憶の採集

まちづくりオーラル・ヒストリーは、語り手と聞き手の対話により、個人の記録を収集・記録し、人生史の一端をひも解き、情報の蓄積・アーカイブ化を図ることからはじまる。語り手のかたちにならない「弱い語り」とでも呼ぶべき人生史の深層に宿る記録を言語化する作業を行う、聞き手と語り手の共同作業が重要な意味をもつ。また、そこから引き出された言葉がまちづくりを進めるための共通言語となることも期待される。

②口述史記録の編集

収集した語り手の記憶をテキストとして記録し、口述史として編集する。成果の公開許可を語り手から得ておく必要がある。

③コミュニティ史の編纂

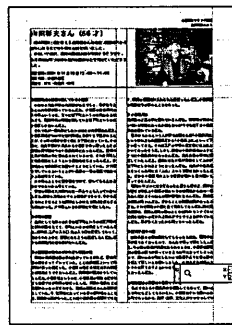
語り手ごとに編集した個人史を、時代、場所、テーマといった指標を手がかりに積層させ、個人に依拠したデータから地域に依拠したデータに変換し、コミュニティ史として編集する。

④市民との共有（社会的文脈の認識）

編纂したコミュニティ史を通して、地域社会がまちづくりの文脈として共有するとともに、それに現代的な解釈を加えることにより、まちづくりの将来像を導くことを目指す。そのためには、コミュニティ史のレビューが不可欠であり、その結果、「まちづくりオーラル・ヒストリー」は社会性や公共性を獲得するとともに、コミュニティの固有の歴史的背景に依拠したま



写真1 個人の記憶の採集



・図2 口述史記録

[illegible]

図3 コミュニティ史(徳島県旧由岐町木岐地区)

ちづくりを発展させる、計画技術足り得る潜在性を有することになる。

3. まちづくりの展開

3-1 地域に還元するという課題

前述の通り「まちづくりオーラル・ヒストリー」は、市民との共有により社会化される。したがって、収集・編集したコミュニティ史をいかに地域へと還元するかが重要である。本節では、筆者らの実践の中から、神奈川県小田原市と徳島県旧由岐町（現美波町）の事例を紹介する。

3-2 神奈川県小田原市での活動

①小田原遺産調査とオーラル・ヒストリーの活用

小田原市政政策総合研究所（以下、研究所）では、小田原市、市民、大学、専門家が連携した、まちづくりの実践的な研究を進めていた。2001年度には、研究所と複数の大学による「小田原遺産調査」が実施された。筆者らの早稲田大学グループでは、地場産業の担い手に対して、個人史の収集を行うことを提案し実施した。

研究所と小田原TMOと東京大学が企画した、まちづくりイベント「交流の舞台・板橋蔵かふえ」において、収集した個人史を市民と共有する活動として、「懐古新聞」「まち語り」を実践した。

②「懐古新聞」の試み

「懐古新聞」とは、編集したコミュニティ史を時代別に整理した上で、まちの様子を特定の時間断面で新聞形式に編集したものである。ここでは関東大震災～終戦の時代をクロスセッションとするものを発行した。例えば「ブリ大漁」という見出しと古写真を並べ、市民の口述の証言を紹介している。新聞形式で読みやすいものとし市民の目に触れる機会を増やすことで、社会的記憶としての共有を試みた。新たな「懐古新聞」の発行願いが寄せられ、地域に還元する手法としての可能性が伺えた。

③「まち語り」の試み



図4 懐古新聞

「まち語り」とは、編集した口述史記録を朗読し、その内容を踏まえた座談会を通じて当時のまちの様子を振り返る試みである。会場では古写真や職人の仕事風景を環境映像として投影し、サウンドスケープとして作業の音を与え、聴衆の五感を喚起した。例えば、朗読後の座談会では畳替えの際に軒先に畳が並べられていた風景が紹介され、さまざまな職人が、依頼主の庭先で作業をしていた様子が紹介され、参加者の間で共有された。このように朗読後の座談会では、個人史の共有にとどまらず、参加者から新たな情報が発信され社会的記憶として共有されうるのである。

④市民自らによる「まち語り」

この後、市民から自主的に「まち語り」を行いたいという希望が寄せられた。そのため翌年度には、個人史の収集から



写真5 まち語りの様子



写真6 朗読する市民研究員



写真7 市民主体で行われたまち語り

「まち語り」に至る一連のプロセスを市民と協働で行うことで、ノウハウを大学から市民へ移転することとした。その後、小田原ではさまざまな機会で開催された「まち語り」が行われた。筆者らのいう「まちづくりオーラル・ヒストリー」が市民自らの手で行われたのである。

⑤まちづくりオーラル・ヒストリー・アーカイブの作成

「懐古新聞」「まち語り」とも、市民と情報を共有する手法としての可能性を示すことができた。しかし、編集したコミュニティ史の一部を共有したに過ぎず、新たな情報蓄積も難しいという課題があった。

そこで筆者らは、それらの課題に対応するために、語り手ごとにデータを整理するとともに、時代、場所、テーマといった、さまざまなキーワードが付加されたコミュニティ史を検索、閲覧、追記できるデータベースとして「まちづくりオーラル・ヒストリー・アーカイブ(以下、MohA)」を開発した(図8)。

3-3 徳島県旧由岐町での活動

2003年より筆者らは、(財)漁港漁場漁村技術研究所の研究助成を得て、徳島県旧由岐町木岐地区において「まちづくりオーラル・ヒストリー」調査を実施した。木岐地区において改善をした取り組みについて紹介する。

①社会的記憶の空間化

社会的記憶を空間情報(位置情報)として整理し共有することは、MohAを用いて試みていたが、触知認知性や一覽性に乏しいことが課題であった。一見して分かるものとして模型が優れているので、場所性のある調査結果を透明シートに記し模型に載せ、社会的記憶が蓄積した意味空間を視覚的に表現することを試みた。

②活動を誘発するまちづくりオーラル・ヒストリー

調査成果の発表会を市民に対して行い、幾つか提示した直ぐに実現可能なアイデアの中で、市民の支持のもっとも高

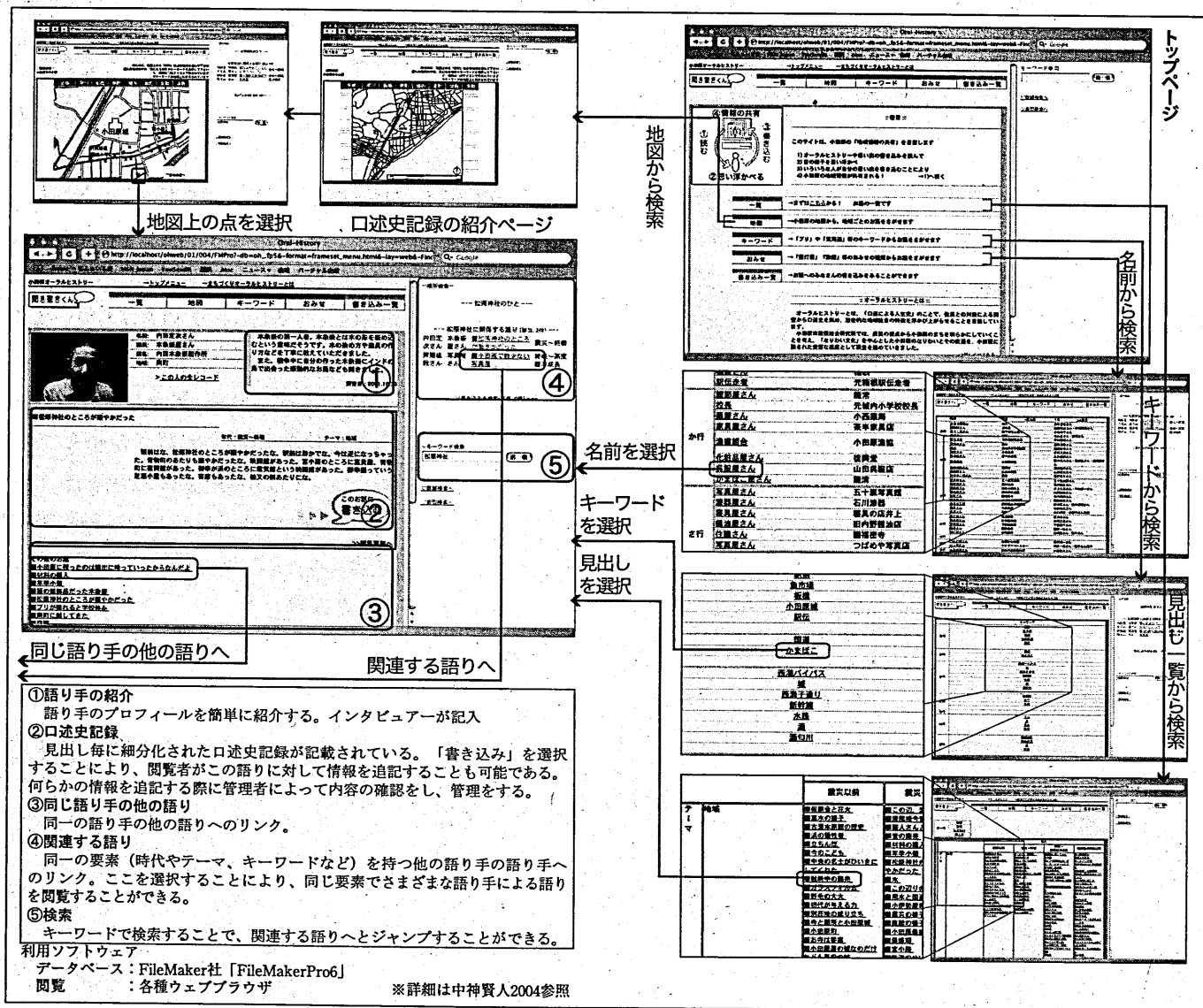


図8 まちづくりオーラル・ヒストリー・アーカイブ(MohA)の仕組み

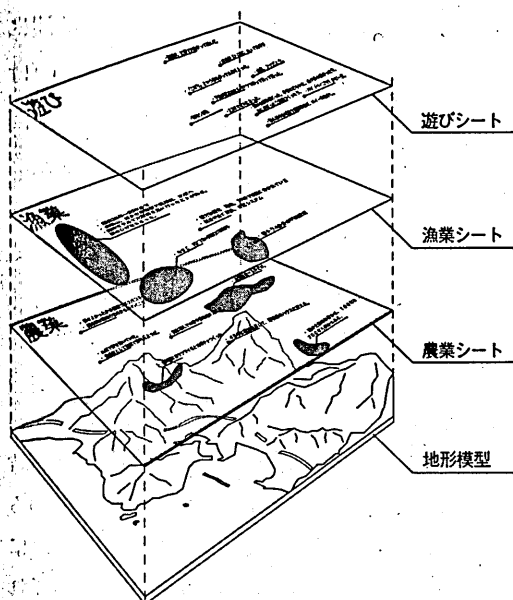


図9 模型による社会的記憶の空間化のダイアグラム

かった「昔の遊び」の再現を、発表会の翌日に行った。「子どもたちは自分たちで山中に罠を仕掛け、小鳥を捕って地区のたまり場であったお好み焼きの店で焼いた」という1960年代の語りに基づき、「こもち」と呼ばれる罠を再現した。これには地元小学生やその親も多数参加し、オーラル・ヒストリーを通じた多世代交流が実現した。

③MohAを使った地域学習の展開

小田原での取り組みの中で実験的に構築したMohAを活用するため、小学生を対象とした2日間の総合的学習のプログラムを実施した。このプログラムでは、1日目にMohAを利用して、各々の興味からさまざまな個人の記憶を抽出し、地形模型の上の透明シートに情報を書き込んだ(情報教育・地域学習)。2日目は、地域の人々を小学校に招き、生徒が地域の人々にインタビューをすることで、地形模型の上に、さらにそのインタビュー内容を書き加えていった(地域学習・コミュニケーション学習・情報収集)。

MohAと地形模型の両方を活用することで、子どもたちは場所と情報との関係を学習できた。また、継続的な情報収集による更なる自発的な学習の可能性が見受けられた。

4. まちづくりオーラル・ヒストリーの可能性

これまでの取り組みを通して、見えてきた可能性を以下の4点にまとめる。

①社会的記憶というまちづくり情報(社会資源の発見)

「まちづくりオーラル・ヒストリー」は、これまでのまちの見方とは異なる視点を与えることができる。「まちづくりオーラル・ヒストリー」によって「ふつうの町」に眠る独自の社会的記憶



写真10 昔の遊びの再現の様子



写真11 MohAを活用した地域学習

を再認識することを通じて、その潜在的な価値を見いだし、身近な環境を構成する社会的文脈を再認識することができる。

②市民の自発的な運動の展開(新しい公共の誕生)

「まちづくりオーラル・ヒストリー」は、「ふつうの町」に必ずある独自の社会的記憶に焦点をあてることで、地域独自のまちづくりを展開する上での扉を開くことができる。また、「気づき」を与えることで、それらを支える人づくりや組織づくりにも大きく寄与することができる。

③社会に開かれたデータベース(社会資本の形成)

MohAによるデータベース化は、地域毎のまちづくりの基本情報のプラットフォームを構築することになる。各人が各様に閲覧するとともに、情報を追記し更新していくことが欠かせない。そのためには常に公開されアクセス可能である必要がある。そのことで、社会的記憶や社会的文脈に配慮したまちづくりに係わる計画・デザインへの情報提供が可能となる。

④市民自治と景観まちづくり(社会システムの創発)

社会的記憶の中にはかつての地域の自治の姿も含まれており、その再認識を通じまちづくりを市民が自発的に展開することにより、地域の社会的記憶に配慮した市民自治を育むことが可能となる。その市民自治によるまちづくりの成果は、身近な社会的文脈を配慮した懐かしくも新しい景観として還元されうる。このように人々の生活の営為と地域景観との関係が、市民自治という社会システムとして創発的に再構築されうるのである。

5. 今後の展望

5-1 地域の新たな共同作業：暗黙知の形式知化

かつて地域社会においては、地域環境を形成し維持していくための「暗黙知」があり、明文化されなくとも共同作業等を介して次世代へと伝わってきた。しかし、地域社会は地域環境を形成する自治を他人任せにしてしまった。そのため地

域の「組織知」であるべき地域情報は「個人知」に留まっている。地域環境を形成する論理は、地域の独自性に依拠している筈である。「個人知」に留まった「暗黙知」を明文化し「形式知」に高め、市民に広く共有された「組織知」へと変換する必要がある。筆者らは「まちづくりオーラル・ヒストリー」の実践により、その一つの方法を確立した。

近年、「聞き書き」と称する取り組みが全国各地で行われており、「まちづくりオーラル・ヒストリー」にも通じるものがある。このような活動を、現代社会の地域における新たな共同作業として位置づけ、地域環境を形成する市民自治を取り戻すきっかけとすべきである。

5-2 サイバースペースの地域情報コモンズ

昨今のコンピュータの発達と普及にともなって、地域情報を丹念に収集しストックし公開し更新しつづける、きめ細やかな地域情報アーカイブを各地で構築し、地域固有のまちづくりを展開する時代が到来している。このような地域情報アーカイブは、サイバースペースにおける新たなコモンズである。そのマネジメントはひとつの自治のカタチである。管理する主体として、まちづくりを進めるNPOなどの市民団体や地縁団体が望ましい。校区レベルであれば小中学校など、自治体レベルであれば博物館などの役割も期待される。

さらにはGoogle Map等のシステムを援用することで、さまざまなスケールでの範囲の情報を統合的に集約し、これをWeb上に公開することも想定できる。今後、移民を受け入れて行くであろう我が国において、生活課題を抱える移民の住民がweb上を検索することが想定できる。このとき、「まちづくりオーラル・ヒストリー」は地域に住まう作法としての社会的記憶を届けられる可能性があり、地域住民との連帯感を醸成する可能性を秘めている。

5-3 景観から生成され景観に還元される

ふつうの町に宿る人々の記憶の採集からはじまる景観まちづくりのプロセスが「まちづくりオーラル・ヒストリー」の取り組みを通じて、市民自治を育み、それぞれの地域のまちづくりの営みを映す景観へと還元されることを目指したい。まちづくりの成果を景観として表現することは、まちづくりを多くの市民に対してわかりやすく、親しみのもてるものとするだろう。

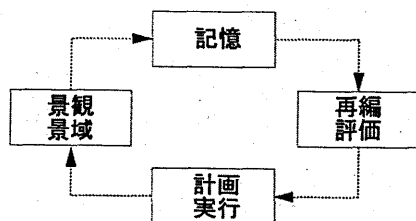


図12 景観から生成され景観に還元される循環

「まちづくりオーラル・ヒストリー」は景観から生成され景観に還元されていく、大きな社会システムの循環の中に位置づけられる。そうした景観と人々の暮らしの応答関係により空間は場所化し、人々は「まちの歴史」から息吹を与えられたアイデンティティを自らの中に宿すことができるのである。

【注】

注1) 筆者らは、景観の視覚的概念(可視的形象)と地域概念(地域単位)を併せ持つものを「景域」と呼んでいる。緑地計画学の分野において、「景域」とは「一定の単位として認識される地表の一部であって、生態学的に一定のまとまりを有する空間であると同時に固有の文化創造の基盤ともなり、また人々が共属感情を持ちうる歴史的地域」(井手久登1985)とされる。筆者らは、そこに新たに社会的文脈から景域を解釈し、「景域」を生活者によって共有された社会的記憶が内在する地域単位と捉えている。

注2) 筆者らはこれまでに、山梨県早川町(1998年度～)、新潟県高柳町(1999年度)、愛知県足助町(1999年度、2000年度)、神奈川県小田原市(2001年度、2002年度)、兵庫県城崎町(2003年度)、徳島県由岐町(2003年度、2004年度)他、において実践してきている。

注3) 図2以外のすべての図表・写真の出典は参考引用文献2)である。

【参考引用文献】

- 1) 井出久登、武内和彦「自然立地的土地利用計画」東京大学出版、1985
- 2) 後藤春彦、佐久間康富、田口太郎「まちづくりオーラル・ヒストリー～「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く」水曜社、2005.3
- 3) ドロレス・ハイデン著、後藤春彦他訳「場所の力～パブリック・ヒストリーとしての都市景観」学芸出版社、2002.3
- 4) 中神賢人、後藤春彦、田口太郎、山崎義人「口述史調査記録のデータベースシステムの開発に関する研究～まちづくり・オーラル・ヒストリーを事例として」日本建築学会技術報告集第20号、p301-p306、2004年12月
- 5) 田口太郎、後藤春彦、山崎義人「神奈川県小田原市における「まち語り」「懐古新聞」の取り組み～まちづくり・オーラル・ヒストリー研究 その1～」
- 6) 小田原市政策総合研究所「小田原市政策総合研究所研究紀要小田原スタディ第2号」p15-p66、2002.6
- 7) 岡村竹史、後藤春彦「住民参加型ワークショップによる総合的・体系的計画づくりへの試みー「まちづくり人生ゲーム」の提案と検証ー」環境情報科学25(2)、p36-p42、1996.5